

犬・狼の視点と比喩表現からみる人間研究

芳川 敏博 (京都府城陽市)

I はじめに

世の中には動物文学が多く存在する。アメリカの小説家ジャック・ロンドンの『野性の呼び声』(*The Call of the Wild*) (1903)¹⁾ も一種の動物文学であることは事実だが、この作品は1890年代後半のアメリカ社会における単なる娯楽だけを目的とした動物文学ではない。もっと奥深い作者の人間や文明に対する思想が表現されており、時と空間を超越した普遍的な真の「愛」などの個人的な苦悩を扱っている。

『野性の呼び声』は100年を経過した今日も全世界に多くのファンを持ち、子供から大人まで愛読されており、時代によって読む人によってこの作品のテーマが異なる。大別すると、1) 娯楽・冒険の動物物語、2) 自然主義の適者生存、3) 個人と社会の関係を扱う文明研究に分けられる。以上のテーマを認めつつ、ロンドンが意図していた真のテーマは、人間関係や人間の欲望・エゴイズム、孤独、信頼、愛などを扱った人間研究にあると推測する。つまり、より個人的で哲学的な準自伝的小説というわけである。

日本ジャック・ロンドン協会会長の辻井栄滋氏は『地球的作家 ジャック・ロンドンを読み解く』の中で「登場人物の氏名や作品名には『マーティン・イーデン』のテーマに沿った意味や象徴性が内包され、そのことも作品に陰影や奥行きを与えている」²⁾と述べている。ロンドンの比喩表現の巧みさが『野性の呼び声』の人気の秘密の1つであると考えられる。その比喩表現は作品の中に奥深く組み込まれ、知らず知らずのうちに常に読者に語りかけている。このような構成の巧みさが作品に重みと緊張感を与えているので、この視点から『野性の呼び声』の人間研究に迫ってみたい。

ロンドンの作品には犬が多く登場する。『野性の呼び声』にもいろいろな性格と役割を持つ犬が登場し、いろいろなタイプの人間と厳しい自然の中で本音でぶつかりあう。犬・狼と人間の関係を知ることは人間の欲

望の本質に迫ることになるので、犬・狼の視点からもこの作品の真のテーマを考察する。

以上のような視点から『野性の呼び声の』テーマについて考え、ロンドンとこの作品の魅力を紹介する。

Ⅲ 比喩表現からのアプローチ

まず『野性の呼び声』に出てくる主要な名前からアプローチする。ロンドンは比喩表現が得意であるので、ここでは犬(dog)は人間(fellow)であることを前提とする。(実際、dogにはfellowという意味がある)

この作品は、大半が犬のバック(Buck)の視点で書かれている。この英語の意味は、「元気な若者という意味やお金」(A fleet footed youth; money)という意味をもっているので、若々しい野望に燃えるロンドンはこの作品を通して19世紀後半から20世紀初期の工業化社会における人間の欲望とその矛盾を表現することに主眼を置いていると仮定される。

『野性の呼び声』の「野性の」(Wild)という意味は一般的な「野生の」(living and growing in the natural environment)というものと、「文明化されていない」(not civilized)という意味や「束縛されていない」(unrestrained)というものがある。つまり、悪しき文明社会からの解放と人間らしい生活を理想としている。

『野性の呼び声』の「呼び声」(The Call)は、本来の犬の性格=人間性を取り戻す(back)ための内なる声で、バック(Buck)=ロンドンの理想や願望(勝者・真実・愛・信頼・幸福・安らぎ)をも意味していると考えられる。

最後の主人であるジョン・ソントンのジョン(John)という名前は「神からの慈悲深い贈り物」(God's gracious gift)、つまり愛(love)という意味がある。その上、作者のジャック・ロンドン(Jack London)のジャック(Jack)という名前はジョン(John)の愛称で、「神からの慈悲深い贈り物」(God's gracious gift)という意味を持つ。このことからロンドンは、愛・信頼感という視点からも矛盾に満ちた社会の解決口を探ろうとしているのかも知れない。

さらに想像力を働かせて、Buck と Jack、そして、Thornton と London は発音が似ており、Jack は John であることを考え合わせると、主人公のバック(Buck)と準主人公のジョン・ソーントン(John Thornton)は、作者のジャック・ロンドン自身なのかもしれない。すると、『マーティン・イーデン』(*Martin Eden*)の英語の名前のイニシャルが自分自身(ME)であり、この小説が自伝小説であるのと同様に、『野性の呼び声は』は準自伝小説であると解釈したい。ロンドンは20世紀の初期の急激に変化する社会の中でお金(資本主義・矛盾に満ちた文明・集団主義)と愛(社会主義・原始社会・個人社会)の問題で悩みつづけ、バック(Buck)を通じて、お金を、また、ソーントン(Thornton)を通じて本当の愛や信頼感、そして幸福について見つめなおしている。

さらに、小文字の john という英語は、「若者、労働者、水夫」という意味があり、jack-of-all-trades は「何でも屋」である。Jack-of-all-trades に続く、master of none という部分は、ロンドンが必死に教養を身につけ金持ちになろうとダーウィンやニーチェ、スペンサー、マルクスなどいろいろな思想家の本を読み影響を受けたが、それほど深いものではなかった点と共通するのかもしれない。

Ⅲ dog ((犬)) と wolf ((狼)) からのアプローチ

次に犬・狼からのアプローチを試みる。これは、犬や狼の登場がこの作品の中でどのような意味を持つのかということの前提になるものである。

人間と犬・狼の歴史的関係について述べる。犬の先祖は狼で、厳しい自然の中で狼は、人間や他の動物と対抗するために群れを作って生活していた。つまり、当時は狼と人間とは同じ動物として対等なライバル同士であった。しかし、人間は外敵から身を守るために狼から変化した犬を個々に利用し始めた。人間は犬に食料や住居を与え主人となり、犬は人間に従うようになった。そして、人間は犬を自分の都合のよいように犬を交配させ、いろいろなタイプの犬を生み出した。その結果、犬はもう少し高度な仕事、たとえば、橇を引いて荷物を運ぶことや羊を移動させることなどの仕事を人間に代わってするようになり、人間と犬の主従

関係は強固なものになった。このようにして犬は信頼のおけるリーダーのもとでは、与えられた仕事を忠実にやり満足感を感じるようになった。しかし、18世紀後半の工業化の時代になると、犬が行っていたことの大半は機械などによって行われ、犬はもてあそばれ、ペットとして人間に可愛がられた。この頃も人間と犬の主従関係は存在したが、真の信頼関係や愛に基づいたものではなく、人間は犬を番犬や孤独を癒すための手段として利用した。時には人間は犬の扱い方を間違え、犬が権勢症候群になったり問題犬になったりして、人間と犬の主従関係が逆転することもあった。『野性の呼び声』では、この状態から徐々に時代を逆戻りして、人間と犬の関係を考えている。

人間研究の小説になぜ犬を多く登場させたかということ考察する。それは、1) 犬という身近な動物から見た人間を表現しているので読者の感情移入が容易であること、2) 犬という人間より低位にある動物から見た人間を客観的に追究しているので人間としてのプライドが比較的傷つきにくい、という側面がある。

なぜ犬のバックを主人公にしたかという点についての一般的な答えを次に述べる。1) 当時、原始生活を題材にしている小説や動物小説が受け入れられる状況にあった。2) ロンドンの身のまわりには常に忠誠心のある犬がいた。3) 知り合いの家にジャックという犬がいた。³⁾ 4) ロンドンは、自分の分身を小説に登場させることがよくある。5) バックはすぐれた体力・精神力・知性をもっているセント・バーナードとコリーの雑種である。6) バックは厳しい社会を生き抜くロンドン自身である。7) 人間の身体的・性格的な特徴からペットの名前をつけていることが多い。8) 犬の先祖は狼で、荒々しい自然に適応することが上手である。9) 犬も人間も自然の影響を受けている動物である。10) 人間は過去にどう猛な動物から身を守るために犬を手に入れ、食事と住居を提供する代わりに、最近では人間の孤独を癒すために犬を利用している。

原文(英語)の *The Call of the Wild* の中で Buck という語は313回、dog(s) という語は197回用いられている。⁴⁾ このことは、Buck がこの小説で非常に重要な役割を果たしており、犬の視点からこの小説を

研究することが大切であることを意味していると思われる。英語の dog という単語は、man's best friend(人間の最良の友)や faithful as a dog (非常に忠実な)というように良い意味に使われている場合があり、これがこの作品の人気の理由の一つなのかも知れない。

しかし、dog という英語は大半が悪いイメージをもつ。dog は元々 underdog(負け犬、敗者)という意味があり、作品の中で犬を登場させ当時の悲惨な状況を示しているのである。また、いろいろなタイプの犬を登場させ被支配層(労働者)の多様性を、そしていろいろなタイプの人間を登場させ支配層(資本家)の多様性を表わし、両者が厳しい自然の中で大半が死亡するのである。

以下に、dog のもつ一般的な悪い意味の例を示す。

dog(くだらないやつ)、dirty dog(卑劣なやつ)

dog it(ずぼらな生活をする)、dog's death(惨めな死に方)

dog poor(ひどくまずしい)、go the dogs(落ちぶれる)

lead a dog's life(みじめな暮らしをする)

throw ...to the dogs(犠牲にする)

treat a person like a dog(人を粗末にする)

dog-eat-dog world(食うか食われるかの世の中)

wolf(狼)は犬の祖先であり、living and hunting in packs(集団で生活や狩りをしている)動物である。また、wolf という語は、飢えや貧困を意味している。この作品の中では、犬であるバックが狼のリーダーになる。これは、矛盾に満ちた文明から脱出した状態のことを意味しているのかもしれない。また、wolf は lone wolf という表現があることから、孤独ということを示しているのかもしれない。

犬はある意味ではロンドンの厳しい境遇を表わしており、貪欲になって成功を夢見る姿そのものである。一方、彼は一匹狼のように孤独で、いろいろな人から裏切られている。成功を収めて Wolf House(狼城)を建てたが、火災により理想の家を一瞬のうちに失くしたことも、彼の波乱万丈の人生を示している。

Ⅳ バックといろいろな主人との信頼関係・愛

「ジャック・ロンドンが意図していた真のテーマは、人間関係や人間の欲望・エゴイズム、孤独、信頼、愛などを扱った人間研究にあると推測する」と述べたが、ここでは特に主人公のバックといろいろな主人との信頼関係・愛について物語に沿って考察する。

人間同士の愛を考える場合と、犬と人間の愛を考える場合では相違点がある。犬と人間との真の愛を考える場合、1) 犬の食料と住居の確保、2) 犬の本能と習性の理解、3) 人間のリーダーシップ、4) 犬と人間の信頼関係、が不可欠である。

主人公のバックは、いろいろな環境の中でいろいろな主人に仕えている。以下、この作品を振り返りながら、バックと主人との関係を考え、それぞれの段階でのバックの幸福度について推測したい。このようなことを知ることにより、作者の人生観に迫ることができる。

まず最初に、バックとミラー判事との関係から考えてみたい。バックはカリフォルニアの日の当たる大邸宅に住んでおり、食料や住居の面ではまったく不自由していない。また、バックは寒い冬の夜、ミラー氏の足元で安心して寝ており、信頼感があった。しかし、犬の本能・習性の理解やリーダーシップという点では不十分で、物質的には十分に満足していたが、精神的な面で不安定なところがあり、完全には幸福に感じておらず、また、主人に対して真の愛も感じていない。バックは快適な環境で甘やかされて他の犬や人間をも支配しており、やたらと擬人化されたような思いやりは犬も飼い主も不幸に陥り、問題行動の発生原因になる。(権勢本能: 群れ仲間が従属的な行動をいつもとれば、主導的行動をとり順位を上げボスとして君臨しようとする意識を生む。犬が可愛くてついつい犬の言いなりになり従属的に対応をしていると、犬の権勢本能が強化されて、頂点に立ち家庭内を仕切ろうとし、権勢症候群となる。服従本能: ボスがリーダーシップを発揮していると従属的な行動をとり、群れの中で平和に暮らそうとする本能である。飼い主がいつも主導的対応をしていれば、犬は喜求的に従属的な行動をとる服従本能習性がある。)

次に、バックと赤いシャツの男との関係について考察する。この男はバックに「鞭と棍棒」により生きることの厳しさを教え、リーダーシッ

プや犬の本能・習性の理解はもっている。しかし、バックはお金により取引され、闘争本能を強制的に押さえ込まれ完全に打ち負かされた赤いシャツの男に対して信頼感はまったくなく、愛もまったく感じていない。この男はバックに文明から隔離させ、野性での生活の基礎をつくった。

バックとフランソワとペローとの関係について考える。彼らはカナダ政府の郵便配達人で、リーダーシップや犬の本能・習性の理解も十分にあり、犬の食料の管理も適切である。しかし、この2人はバックをお金で取引しており、仕事の効率という観点でバックを扱っており、バックは2人に対して尊敬はしているが十分な信頼関係はなく、真の愛ももっていない。

バックと3人組のハル、チャールズ、マーシーディーズの関係は最悪である。彼らは厳寒の地での冒険は未経験で、人間の醜い欲望の持ち主である。また、食料は最初は十分に与えられていたが、計画の甘さから後半は食糧不足になった。その上、3人のリーダーシップの不統一が見られ、犬の本能・習性の理解も不十分で、バックや他の犬に無理な労働を強いて疲労困憊にさせてしまった。この3人もバックをお金で取引しており、自分たちの欲望のために利用しており、悪しき文明を象徴している。従って、バックは信頼感も愛もまったく感じていない。

最後にバックとソートンとの関係について考察する。ソートンは犬の本能・習性の理解やリーダーシップも十分に、厳しい生死をかけた環境の中で助け合いを通じて信頼関係が生まれ、バックとの間で真の愛があると解釈できる。バックがソートンの手をなめたことから、ソートンに対して全身で真の愛を感じていることがわかる。バックは、今までの体験を通じて食料や住居の確保は自分でできるようになっている。バックはソートンと一緒に金鉱を求めて旅行する時に今までにもない幸福を感じるのには、真の愛を獲得した結果であると思われる。この段階で、お金と愛の調和、つまり、悪しき文明を救うのは真の愛であるということになる。また、ソートンの死後も、狼のリーダーとして厳しい環境で生きている時でもソートンの墓参りをしている。これは、いかにバックにとっていかなる状況でも真の愛が大切であることの証明でもある。

Ⅴ まとめ

以上見てきたように、推測であるがこの作品には多くの比喩表現が含まれている。しかし、これだけ多くの偶然が重なるということは、作者のロンドンが意識的にこれらの表現を用いた可能性があり、構成力の巧みさを示すものである。

『野性の呼び声』の魅力は、親しみやすい犬とともに広大な荒野を金鉱を求めて冒険するというストーリーのおもしろさだけでなく、「文明と自然、資本主義と社会主義、個人主義と集団主義、孤独と愛、唯物主義と唯心主義、強者と弱者」といったアメリカ人好みの善か悪かという二分法を著者のロンドンの波瀾万丈の生涯と重ね合わせながらダイナミックに描いているからである。

社会や自然の力に翻弄され、また、二分法では解決できない矛盾の中で、自分の理想像を必死に探し求めて生きるロンドンの誠実性が犬の視点から見事に描かれている点も、時代や国境を越えて多くの人に読まれている大きな理由である。このように、『野性の呼び声』を通じて激動期を生きたロンドンと社会の苦悩を読みとることができる。ロンドンは基本的には悲観論者で、犬を通じて人間や文明を悲観的に見ている。犬のような悲惨な人間の生活を救うのはお金ではなく、生命力や真の愛・信頼関係であると考えているのかもしれない。

((注))

- 1) 本稿はジャック・ロンドン著、辻井栄滋訳『野性の呼び声』
(現代教養文庫、2001)とインターネット資料“The Jack London Collection” <http://sunsite.berkeley.edu/London/> に基づいている。
- 2) 辻井栄滋著『地球的作家 ジャック・ロンドンを読み解く』
(丹精社、2001) p.212.
- 3) ラス・キングマン著、辻井栄滋訳『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』(本の友社、1989) p.51 と p.217.
- 4) 英文分析ソフト“WordSmith Tools Word Lister に基づいている。